

オヤジ

えと題字・村上豊

父が教えてくれた世界

猪口邦子
いのぐちくにこ
(参議院議員・上智大学名誉教授)

父の母親は中房総出身の歌人だった。

最近では地質時代のチバニアンの地層で注目される養老溪谷の近くで明治半ばに生まれた祖母は、進学し、学校の先生になり、若山牧水の弟子となって女流同人誌も主宰したという。そのためか、父は、女性は本を読み、書くべき人と思っていたようだ。

ようやく字が読めるようになった私に、父は会社から帰ると、よく本を読んでくれた。日曜日になると、市川市の駅近くの本屋に私を連れて行き、次に読む本を一冊買ってくれた。その一冊を私は素直に懸命に自分で読んでみるが、頁をめくる速度は遅く途方にくれる。そこに父が登場し、続きを読みだすと、ナイチン

ゲールは兵隊さんの命を助け、キューリ―夫人はまたたくまに大発見をする。卓袱台のある畳のその小さな部屋から、父は私を世界に連れ出した。

思えば、父こそ、世界に出たかったのかもしれない。父が読んでくれた本は、ほとんどが、世界の偉人伝や少年少女の



世界文学全集であったことを思い出す。

そして私が十歳のとき、父は本当に世界に出た。海上火災保険会社に勤めていた父は、突然、ブラジルのサンパウロへ転勤となり、母と妹二人の五人家族で私たちは南米に行った。英語の学校で苦勞する私に、父は英国にはジョン・ロビ

ンソンという女性の経済学者がいることを何度も伝えた。異郷で父の机の上には二宮尊徳の本を読み像と、「努力」という字を彫った置物がいつもあった。

五年の勤務を経て、欧州経由で東京に戻るとき、ロンドンの古びた本屋で父は立派な装丁の『嵐が丘』を買ってくれた。スーツケースに入れるとつぶれると言う私に、父は「本はいつも手に持つものだよ」と言った。十五歳の夏、私はその本を手に羽田のタラップを降りた。そういえば、今年はエミリー・ブロンテ誕生二百周年。初版本は男性名で出版されている。

老境の父はこの冬、骨折して入院した。弱り果てた父に、思わず、「本を書くから」と言ってしまう私。その言葉が何より父を元気にすることを知っている娘に、父は大きく目を見開いて、「そうか、本を書く！ すこいね」。ずっと付き添っている末の妹が私にそっと言ってくれた。「おじいちゃんがこんなうれしそうな顔をしたのは初めてよ」。